

氏名（本籍）	アラ 荒	キ 木	ケイ 恵	シン 信（石川県）
学位の種類	博士（文化財）			
学位記番号	博美第118号			
学位授与年月日	平成15年3月25日			
学位論文等題目	作品「国宝 平等院鳳凰堂内板壁絵(北面側壁)中品中生図(部分)」想定復元模写 論文「国宝 平等院鳳凰堂内板壁絵(北面側壁)中品中生図(部分)」における色料の経年変化に関する研究			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	宮廻正明
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	柳沢孝
（作品第1副査）	”	”	（ ” ）	田淵俊夫
（副査）	”	”	（ ” ）	加藤寛
（ ” ）	”	非常勤講師	（ ” ）	神居文彰

（論文内容の要旨）

藤原頼通が落慶供養した平等院鳳凰堂には堂内を荘厳するため、壁扉に「観無量寿経」に説く九品来迎図が描かれた。研究対象作品の「中品中生図」はその中のひとつで、鎌倉時代前期に制作されたと推定されている。法量は縦394.2cm×横339.7cmで、檜板8枚を縦に継いでいる（板1枚の幅は42cm前後）。画面の施法が扉絵と異なり、板の継ぎ目に幅8cm前後の麻布を上端から下端まで布着せし、画面全体に地粉の漆下地を薄く着け黒漆を塗り、その後に白土の下地を施し彩色されている。図様は日本の春景を背景に、往生者に向かい来迎する阿弥陀如来と聖衆が描かれている。本作品の様に、四季絵や名所絵の要素を巧みに取り入れた大画面の九品来迎図は、現存する例が数点しかなく大変貴重であり、堂内扉絵の構図や図様等に類似している点もあるが、制作年代や施法が異なっており堂内壁扉画の中に於いても重要な作品である。しかし、現状は画面全体にある亀裂や剥落のため図様の識別が困難であったり、後補の描線や彩色で制作当初とは全く異なった図様に描き変えられている箇所がある。また、絵具の変化や後補の彩色等のため黄色味を帯びた作品である。

扉絵はすでに絵具の調査や復元模写が行われている。しかし、研究対象作品は昭和28年から昭和32年にかけての解体修理報告や図様から制作年代を考察する研究報告がされているものの、本作品の芸術性に重要な絵具を取り上げたものは少なく、色を文章で表現するため具体的な色調までは分からなかった。また、近代に文化財保存の観点から本作品の現状模写が3度行われているが、これらは当時の状態を記録するに止まり詳細な報告書などは発表されていない。

壁画や板絵など建物にはめ込まれている作品は移動することが難しく、特に開放的な空間にある場合は絵具の変化や剥落等の進みが速く、制作当初の内容や芸術性が失われやすい。研究対象

作品に於いても、制作当初は青色であったと考えられる水面が現状では黄土色に変色している。経年変化を続ける作品をどのように保存継承していくかは大きな課題である。

そこで本研究では現在の研究対象作品の情報を目視の観察に加え、絵具の蛍光X線分析や耐光試験の結果、エミシオグラフィ、赤外線写真、顕微鏡写真、研究対象作品を描いた土佐派粉本や田中納言の模写、堂内扉絵、同時代の類似作品等を参考に可能な限りの方法で読みとり、想定復元模写を行うことにした。想定復元模写では研究対象作品の経年変化以前の彩色を具体的に提示でき、また、内容や芸術性の保存継承に有意義であると考えられる。想定復元模写は研究対象作品が制作された当初から現在も使用されている日本画天然絵具を用い、板絵の持つ独特の質感と色調を表現するため基底材から研究対象作品と同種の素材で行った。

想定復元は、阿弥陀如来が聖衆を伴って寝殿造の山荘に來迎する情景を表している場面（縦103cm×横123.6cm）に限り行った。

彩色の想定復元は、研究対象作品に用いられている絵具や彩色技法を解明し、画面に混在する制作当初の絵具と後補を識別するため、まず研究対象作品の綿密な調査を行った。その際、蛍光X線分析の結果やエミシオグラフィ、顕微鏡写真等を参考にし、美術史の観点からの考察も加えた。次に作成した試験片を用い、絵具の変化を検証する耐光試験の結果を研究対象作品と比較検討し、この結果から制作当初の色調を導き出すことで信頼性の高い彩色の想定復元ができると考えられる。

図様の想定復元は、まず資料写真から上げ写しを行い、現状の全ての描線を描き写す。その後、制作当初の描線だけを別紙に描き写し、図様の特徴を的確に捕らえる。欠損箇所は、エミシオグラフィや赤外線写真、堂内扉絵、研究対象作品を描いた土佐派粉本や田中納言の模写、浄土教の來迎儀礼が描かれた作品、同時代の類似作品等を参考に想定復元した。山水表現の山荘前庭や後方の山々は特に剥落が著しく、広範囲にわたり制作当初の図様が確認できないため、想定復元図が数種類考察できる。そこで、この中で研究対象作品の部分として最も妥当と考えられるものを採用することにしたため推測の割合が他の想定復元箇所より多くなった。

以上から図様、彩色ともに現時点で制作当初に最も近い想定復元ができたと考えられる。この結果を研究対象作品と同種の素材で想定復元模写したことで、板絵の質感を伴った日本画天然絵具独特の色調で経年変化以前の彩色を提示できた。想定復元模写を行う前に研究対象作品の現状に確認できる彩色や状態を忠実に写し取る現状模写を行ったが、これと想定復元模写を比較すると、想定復元模写は制作当初の内容や芸術性を考察する上で十分な成果を得られるものと考えられ、また、図様の欠損や絵具の変化が作品に多大な影響を与えていることが分かり、壁画保存の重要性を感じた。

現状では黄色味を帯びた作品であるが、制作当初は、阿弥陀如来や聖衆の着衣には朱地や鉛丹地等に細かな文様を配し、蓮弁には群青に鉛丹、緑青に有機性の絵具の紫色の配色で縹縹彩色がされる等、配色が綿密に計画された色彩豊かな作品であった。さらに、着衣や垂飾等のいたるところに施された截金や切箔が、來迎の様子を一層華やかにしていた。また、聖衆の天衣が複雑に翻転する様子や雲の棚引く様子は、阿弥陀如来の一行が遠方の峰を軽やかに超えて飛來する動きを表しており、來迎をより幻想的にしていた。この背景には、緑青で塗られた山々が連なって描かれ、山荘の前庭には鉛白に朱を混ぜた淡い色の桜と桃の花や蕾が描かれ、実在感のある春景が

表現されていた。特に水面は、藍で透明感のある特徴的な青色で、深みのある芸術性の高い作品であったことが再認識できた。この様な作品が創建から180年以上経っていると推測される鳳凰堂に描かれたのであり、この頃も堂内は大変壮麗だったと考えられ、藤原頼通の没後も鳳凰堂がいかに大切にされてきたか、人々が深く浄土教に帰依していたかを伺い知ることができる。

本研究は日本画絵具を扱い絵画を制作してきた画家としての経験を基に、美術史的分野、自然科学的分野に基づき考察した結果を統合することで初めて可能となる。この様な研究は総合芸術大学である東京芸術大学でなければ実現し得ない画期的な試みである。堂内の紫外線量の調査結果、蛍光X線分析の結果、漆下地に描く技法や絵具の製造方法などについての複合的な調査結果が得られたことも貴重な成果であった。想定復元模写と同じように今後の古美術研究に多大な影響を与え、壁画の保存の一助となることと確信する。今後、現状では剥落を免れない壁画の保存を考える上では、この様な研究資料を後世に伝えていくということも保存のひとつの大切な方法として考えられていってもよいのではないかと思う。